連載 わがままな宝石たち 10 スペイン幻想（前編）

エッセイスト岩田 裕子

微熱になやまされ、体の具合が悪いまま、夢遊病のように旅したスペイン。何もかも、はっきり覚えていないだけに、すべてが幻のように美しいのです。

ラス・メニーナス

一泊だけのぜいたくのつもりで泊まった、ホテルリッツ・マドリッドで、私は寝込んでしまいました。出かける前からの風邪が、悪化はしていないけど、治りきらない感じ。見たいところはたくさんあるのに、朝になっても起き上がれず、大きな、寝心地の良いベッドの中で、一日、うとうとと眠りづづけたのです。

そうして、３日間を過ごしました。食事は、立派なお仕着せを来た恰幅のいい給仕が運んでくれた極上のスープや、ロビーラウンジの、少し古びた豪奢なソファでいただいた前菜やリッツ・オリジナルのアイリッシュコーヒー。このコーヒーは、クリームの甘さとお酒の具合がほどよくて、風邪のからだにしみわたり、おいしくて何度も頼んでしまいました。

真冬のロビーには、高い天井につきそうなほど巨大なクリスマスツリーが輝き、足元には、きれいにラッピングされたカラフルなプレゼントが山積みされていました。クリスマスになると上演されるバレエ「くるみ割り人形」のリビングの風景そのままに。

そういうわけで、王宮も、ピカソのゲルニカも、マヨール広場もみていないけれど、夢うつつのなか、プラド美術館にだけは、でかけました。

リッツの正面玄関を左へ歩き、信号を渡ると、そこはもう、ゴヤの彫像が黒々とそびえる、プラド美術館のゴヤ門です。館内には、美術書で見知った絵画が、無造作とも思えるほど、あちこちに点在しています。現実なのだろうか、と思うほど。

「ラス・メニーナス」は、２階、中央の大広間にありました。

この部屋は、スペインの至宝ディエゴ・ベラスケスのための空間です。

ひとだかりの向こうに、世界的な名画「ラス・メニーナス」が、確かに存在していました。思ったより大きな絵でした。

この絵は、不思議な仕掛けに満ちています。ベラスケスが王女をキャンバスに描いている場面で、中央には、まだ5歳の愛らしい、しかし、威厳に満ちたマルガリータ王女が、銀糸を織り込んだ豪奢な

「ゴヤ門から見たプラド美術館」　正面の絵画は、ベラスケスが描いたマリアナ王妃です　撮影 岩田裕子

ドレスをまとって立っています。

幼い王女がモデルに飽きて不機嫌そうなのを、二人の若い女官が、両側から

「ラス・メニーナス」ディエゴ・ベラスケス作／1656年／油彩／プラド美術館所蔵／出典:Wikipedia

バルセロナ・ピカソ美術館で購入したカレンダー「ピカソ ラス・メニーナス 2014」ピカソはラス・メニーナスの連作を描いていて、美術館内の大きな広間は、ラス・メニーナス専用でした。

なだめすかしています。立っているのが、イサベル。かがみこんでいるのは、マリア・アグスティナです。右側には、顔の大きい侏儒の女官マリバルボラと、かわいい侏儒の少年ニコラス・ベルトゥサト、そして王女のマスティフ犬。背後には、女官のお目付けとも王妃の侍女ともいわれる女性と、正体のはっきりしない謎の男、鏡のなかに映るのは国王夫妻、フェリペ4世と王妃マリアナです。

画面の左端には、キャンバスを前に絵筆を握るディエゴ・ベラスケス。そして、奥の扉があき、そこには、ホセ・ニエト・ベラスケスという名の王妃の侍従とも、王室配室官ともいわれる男が立っています。部屋に入ろうとしているのか、出ようとしているところなのか・・・

マリバルボラとニコラは、それぞれ、ドイツとイタリアからこの宮廷に連れてこられました。一説によれば、なぐさみものとして。

暗い色調で描かれた、スペイン王室という濃密な異空間。横幅より奥行きのほうが長く、みているわたしたちも、部屋の奥までひきこまれそうになります。

この絵はさまざまに解釈されていますが、そんなことを知らなくても、代々、近親結婚を繰り返した青い血のもたらす、高貴な宮廷の妖しい美しさに、どうしようもなく心をゆさぶられます。熱のある眼には、一枚の絵画にさえ見えず、その空間だけ、１７世紀のスペイン宮廷の一室に、タイムスリップしているようにも思えたのです。

私は、オスカー・ワイルドの童話を思い出していました。

オスカー・ワイルドの傑作短編『王女の誕生日』。この作品は、「ラス・メニーナス」に、触発されて書かれたのです。

王女の誕生日

太陽がきらきらと庭園に輝く暑い午後。この日は王女の誕生日でした。世界中の王女の中でもひときわ高貴なスペインの王女−インファンタ（スペインだけの王女の呼び方）。

この日、12歳になる姫君は、灰色のきらきらかなドレスを着て、太陽よりも輝き、薔薇の花より愛らしかったのです。

イスラムの香り漂う庭園で、宴はあでやかに繰り広げられました。

苔むした彫像のまわりのかくれんぼ。貴族の少年たちの闘牛ごっこ。小さな公爵令嬢の扇を青い鳥に変えたアフリカ

バルセロナのホテル・マジェスティックには、「ラス・メニーナス」にインスパイアされた作品が飾られていました。

人の奇術師、動物の曲芸や綱渡り…。

王宮の孔雀は、噴水近くの欄干の上でひなたぼっこしながら、素知らぬ顔で、一部始終をみていました。

王女の関心は、一人の侏儒の男の子にそそがれています。彼は、生まれて初めて森の外にでかけたのです。はじめて見る王宮のきらびやかさ、姫君の気品と愛らしさに、侏儒は有頂天となりました。王女から髪に飾った白い薔薇を贈られ、侏儒は、幸せすぎて、楽しすぎて、心の底からわき立つような、歓びの踊りを踊りました。

その侏儒は、人里離れた森の奥に住んでいたため、自分の醜さを知りませんでした。しかし、王女にとっての彼の価値は、大きな頭をふりふり、曲がった足でよろけるように踊る、そのひどい姿が面白かったのです。

自分が王女たちのなぐさみものになったのだと知った侏儒は、狂おしいような、絶望的な叫び声をあげ、傷ついた獣のようにうめきながら、物陰に倒れ込みました。そこへやってきた王女は、侏儒をみつけて、操り人形のようで、面白いとほめそやしました。小さな侏儒はそれを聞きながら、すすり泣き、泣きながら、次第に動かなくなります。もっと踊れ、という王女に、侍従は冷静に伝えます。

「このものはもう動きません。心臓が破れたのです」それを知った王女の無情さ、残酷さは、北方の冷たく青く凍えた湖のごとく、清らかにすきとおっているのです。

このお話は、オスカー・ワイルドの数々の物語のなかでも、とびぬけて残酷だ、と私は思います。ワイルドの描く、極彩色の残酷美は、たとえば、鶴屋南北のきりっとした武家娘がひきずりこまれる最底辺の地獄絵図、河竹黙阿弥の因果応報がからまった倒錯的な愛など、ある種の歌舞伎にも似通っています。

また、平安時代には、【侏儒舞(ひきうどまい)】という侏儒の舞があり、朝廷の人々を喜ばせました。爛熟の極致であった平安末期に後白河法皇により編まれた、歌集「梁塵秘抄(りょうじんひしょう)」にも、この侏儒舞は登場します。

青い血の残酷な美しさ。爛熟しすぎて頽廃の足音が聞こえるころの、王侯貴族の好みは、古今東西、どこか似ているということでしょうか。

当時のスペイン宮廷では、侏儒をペットのように愛した、という言われ方もよくします。しかし、毎日接していれば、精神的な結びつきも深くなり、本当に愛したのかもしれません。なぐさみもの、の地位に安住せず、侏儒本人に才覚があれば、出世することも可能でした。現に、右端の少年ニコラスは、この体躯では異例の出世をとげ、国王の侍従にまでのぼりつめたということです。

お話の中で、王女のドレスを、ワイルドはこんなふうに記述しています。王女は、誰よりも優雅で、雅趣に富む装いでした。灰色の繻子のドレスの、膨らんだ袖とスカート部分には、銀糸で厚く刺繍がしてあり、かたいコルセットには、見事な真珠が幾列もちりばめてありました。

そのころ、真珠は天然しかなかったのですから、その一粒を見つけるのさえ、干し草のなかから針を探すくらい奇跡だったのです。そのように貴重な天然の真珠を、王女とはいえ、まだ幼児の姫宮が、糸目をつけず身につけられるのは、繁栄のきわみにいたスペイン・ハプスブルク家(スペイン語では、エスパーニャ・アプスブルゴ)の威光の証に他なりません。

美しき凶器

宮殿の窓から、悲嘆にくれた憂鬱な王が、姫たちの姿をじっと見ておられました。

王女の父君こそ、このお話のなかの、もう一人の主役です。

マルガリータ王女を題材としているので、国王のモデルはフェリペ4世です。

この王は、亡き妃を悼み、悲嘆と憂愁の中に暮らしているのです。

フランス王室から興しいれした王妃を深く愛した王は、ひとり墓にいれることは耐えられませんでした。妃は、ムーア人の医者に防腐措置を施され、命を落とした12年前と同じ姿のまま、今も横たわっているのです。

王は、月に一度、妃の横たわる礼拝堂に赴くと、宝石をはめた妃のあおざめた手をひっつかみ、化粧をした冷たい顔を狂おしい接吻でめざめさせようとされるのでした。

国王の王妃への激しい憧憬は、それ自体が、一遍の詩のようです。

王妃は、フランス生まれとワイルドは書いていますが、現実のマルガリータ王女の母上マリアナは、神聖ローマ帝国からの興しいれです。マリアナは、フェリペ4世の姪にあたり、もともとは、王太子のいいなずけでしたが、彼の早世により、父である王と14歳で結婚しました。

早く亡くなった最初の妃は、フランス王室から興しいれしたイサベル・デ・ボルボンです。マルガリータ王女の姉、後にルイ14世妃となったマリー・ドートリッシュをはじめとする7人の子供を産んでいます。

フェリペ4世の妃イサベル・デ・ボルボンの母は、フランス王妃マリー・ド・メディシスです。この王妃は、けた外れの宝石好きで、多額の持参金をすべて宝石でつかいつくしてしまいました。イサベルも当然、宝石好きだったことは想像に難くなく、国王は、熱愛する王妃のため、美しくもめずらしい指輪をいくつも、贈ったのでしょう。

「王女の誕生日」で、いまわの際に国王がひっつかんだ王妃のあおざめた手に輝く宝石は、最期に身に付けた宝石で、中でも指折りの指輪だったとおもわれます。王妃の指をかざっていたのは、当時スペインの植民地だったコロンビアの、極上のエメラルドだったでしょうか。

命の火の消えた王妃と、そのパワーの強さから、美しき凶器とさえいわれるエメラルドの取り合わせは、ぞくりと身震いするほど、凄絶な美の世界です。

この国王の妃に対する狂気に近い愛は、国王の祖先、ファナ女王のエピソードを思わせます。ファナ女王は、フェリペ4世の、4代前のスペイン女王ですが、夫、ハプスブルク家の王子であったフィリップ美公を、激しく愛し、愛しすぎて、気が狂った、といわれています。この女王のあだ名は、ファナ・ラ・ロカ。狂女ファナです。

ワイルドは、虚実とり混ぜて、この宝石のように美しいお話を書いたのです。

ホテルリッツマドリッドで、著者。

今日はおおみそか。20世紀初め、当時の国王アルフォンソ13世が、マドリッドに王侯貴族をもてなす迎賓館的ホテルがないのを憂い、セザール・リッツに依頼して建てられたというこのホテルは、ニューイヤーズ・イヴに向けて、朝から会場づくりをはじめていました。午後になると、マドリッドのセレブリティが、三々五々とあつまってきたのです。装いに、

エメラルド、サファイア、そして大粒のパールを光らせて。
　体調が悪いなら、ここで帰国しようかと心配する連れをなだめすかし、私たちは、マドリッドを出発しました。イスラムの薫り残る、よりディープなエスパーニャ、炎のアンダルシアへと。

（次号後編につづく）

岩田 裕子（いわた ひろこ）

「宝石とは、美しさ、そして夢」と考え、様々なキーワード ―ギリシャ神話から名探偵ポワロ、バレエや競馬、ピーターパン、王女さまに魔術まで― を駆使して、宝石の魅力を解き明かしている。
慶應義塾大学西洋史学科卒業後、編集者を経て、エッセイストに。宝石に関する著書は、「夢見るジュエリ」「ダイヤモンドAtoZ」(共に東京書籍)、「宝石物語」（大和書房）、「21世紀の冷たいジュエリ」（柏書房松原）、「恋するジュエリ ― スターが愛した宝石たち」（河出書房新社）など。ほかに、妖精、花の本、絵本の翻訳、ショートストーリーの執筆も。文章にあわせ、イラストも描いている。

ホームページは
http://www.shinjukutoyama.com/
ジュエリーと妖精、そして幻想の世界へ、と
http://www.geocities.jp/yamaneko1313
ジュエリーや妖精に関するエッセイスト、岩田裕子です。
(東京日記所収)の二つがあります。

電子書籍好評発売中!

岩田裕子 著（電子書籍）蠱惑（こわく）のジュエリ

定価：600円（税込） 発行：PHP研究所